

### 考察

- ◎ 宮城県における周産期救急医療は従来の搬送形態を残しつつ新たに立ち上げた周産期コーディネーターシステムの2つの柱から成り立っている。
- ◎ コーディネーターシステムの導入により施設間での情報交換が密に行われ、効率のよい周産期・新生児病床の利用、スムーズな母体救急搬送が行われるようになった。
- ◎ 今回の統計からいくつか現状の問題点が見えてきた。
  - ① 母体搬送数の増加に伴い、二次・三次施設の産科病床及び三次施設のNICUは常に満床に近い状況が続いている。
  - ② システム上の問題点としては、夜間・休日のコーディネーター役割分担が周知徹底されていない。

### 結語

- ◎ 宮城県の周産期救急搬送コーディネーター事業を紹介した。
- ◎ 1年間の事業を振り返り見えてきた問題点を分析し、この搬送システムがさらに円滑で効率的に運用できること目指したい。

CUを有する三次医療施設へのコーディネーターが52%と、全体の約半分を占めています。これは妊娠週数の早いハイリスク妊婦の搬送が増えているために、三次施設へ患者さんが集中していることによると考えられます。

宮城県における周産期救急搬送医療は、従来の搬送形態を利用しつつ、コーディネーターシステムの導入により、周産期ネットワーク施設間での情報交換が密に行われるようになり、効率のよい周産期・新生児病床の利用、スムーズな母体搬送が行われるようになりました。しかし、幾つかの問題点も見えてきました。近年、県内の医療機関から搬送要請された妊婦さんを県外搬送させた症例はありませんが、母胎搬送数の増加に伴い、各ネットワーク施設の産科病床、三次施設のNICUが常に満床に近い状態が続いています。この状況を解決するには今後、一次、二次施設とのBack Transferなどの連携も考えていく必要があると思います。また、コーディネーター事業は浸透しているものの、夜間・休日のコーディネーター役割分担までは十分に理解されていないため、電話連絡場所が周知されていないことが多々ありました。

今回、1年間の事業を振り返り見えてきた問題点を分析して、この搬送システムが今後さらに円滑で効率的に運用できることを目指していきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

佐藤 崔先生、ありがとうございました。それでは次に移らせていただきます。次は「助産師外来3年目を迎えて」という内容でご発表いただきます。

内藤久仁子先生のご紹介をさせていただきます。内藤先生は昭和63年、国立仙台病院付属看護助産学校の助産学科を卒業され、その後、公立築館病院に就職され、平成3年、登米市立佐沼病院にご勤務をされておられます。その後、佐沼病院から産科医が不在になるということで、産科医不在の助産師外来を立ち上げて3年目、ということでその活動内容のご発表をしてくださることになっております。よろしくお願いいたします。

内藤 よろしくお願ひします。登米市は宮城県の北部、三陸自動車道登米インターから車で10分の位置にあります。医療圏別医師充足状況は16.7%と、慢性的な医師不足に悩まされているところです。

登米市立佐沼病院は地域の中核病院として登米市の人口約9万人の医療に携わり、以前産婦人科は年間700件前後の分娩を取り扱い、マタニティ・ヨガ、ピクス、ベビーマッサージなどのクラスを開催し、新生児訪問も年間400件余り行って、市の保健師と共に産褥ケアの充実を図っていました。

2007年、国の医療資源の集約化、重点化方針に基づき、分娩取り扱い停止、週二日の外来診療のみという現実になりました。その後、東北大学病院そのほかでの助産師研修を経て、助産師外来開設に向け、計画立案、修正を重ね、病院の理解を得る努力を重ねてきました。

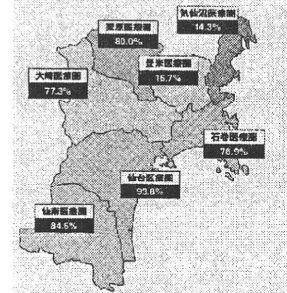
市民フォーラム 地域とチームでお産をまもる

## 助産師外来3年目を迎えて

登米市立佐沼病院  
助産師 内藤久仁子

1

## 医療圏別医師充足状況（平成20年）



平成22年7月11日 河北新報 掲載 2

## 登米市立佐沼病院 助産師外来 立ち上げの経緯

- 2007年9月 産婦人科の常勤医がいなくなり  
分娩取り扱い停止・産科入院中止  
応援医師が外来診療（週2日に縮小）
- 2007年12月 助産師外来開設目的の助産師  
研修に2名が参加

3

## 登米市立佐沼病院 助産師外来 立ち上げの経緯

- 2008年2月 セミオープンシステム開設  
（大崎市民病院、岩手県立磐井  
病院連携）
- 2008年4月 助産師外来 開設
- 2008年10月 石巻赤十字病院 連携
- 2009年 8月 ささき産婦人科クリニック連携

4

## 助産師外来対象妊婦

以下の条件を満たした妊婦

「妊娠リスク自己評価表」でローリスクと  
医師が判断

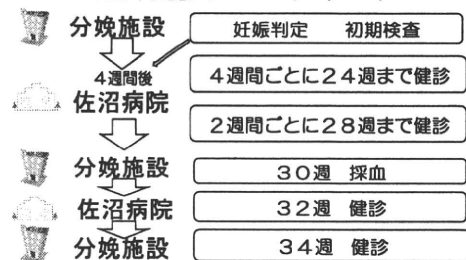
妊娠16週から33週の妊婦

助産師外来に同意



5

## 妊婦健診フローチャート



6

翌 2008 年から、妊婦検診は佐沼病院で行い、分娩は連携病院で行うセミオープンシステムが始動となりました。県の医療整備課、研修先での先生方のアドバイスや連携病院の大崎市民病院の医師の協力もあり、共通診療ノートの導入、広報活動のためのポスターやリーフレットの作成を行い、同年 4 月、待望の助産師外来開設が実現しました。連携病院も大崎市民病院、岩手県立磐井病院のほか、石巻赤十字病院、隣の栗原市のささき産婦人科クリニックの協力も得られるようになりました。

対象妊婦は連携病院間で共通診療ノートを利用し、妊娠リスク自己評価表でローリスクと医師が診断した妊娠 16 週から 33 週までの方です。妊娠リスク自己評価表は、年齢、身長、体重、既往歴、前回の妊娠表などをチェックして点数を合計し、3 点以下が当院で妊婦検診可能となります。そのうち、助産師外来同意書に署名をいただいた方が対象となります。

受診の経過として、妊娠診断後、分娩予約 12 週で医師からローリスクと診断され、セミオープンシステムの希望があれば当院へ通院となります。当院では 22 週子宮経管長、胎盤のチェック、必要時顆粒球エラストラーゼ試験、30 週で採血、再度経管長チェックを行って、33 週までの間、7 回程度通院することになります。連携病院によっては 20 週、30 週に分娩施設を受診するところもあります。

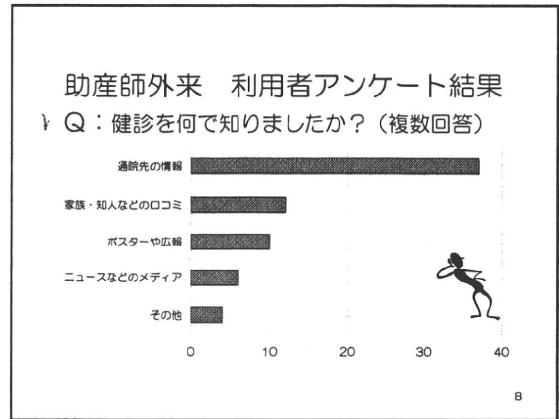
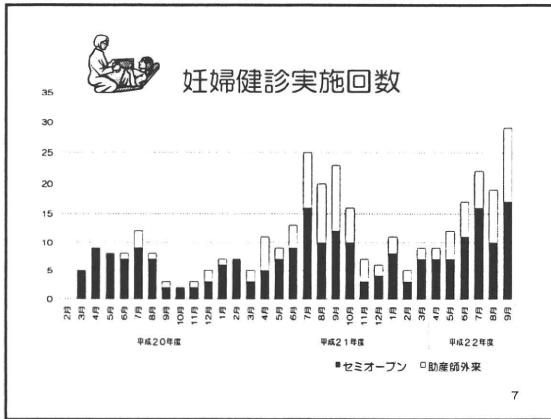
次に、妊婦検診実施回数のグラフをご覧ください。開催当初はセミオープンの方が主で件数も少なく、どうしたら助産師外来を利用してもらえるのか悩みましたが、広報活動として母子手帳交付時にリーフレットを配布、連携病院からの声かけなどもあり、利用者も徐々に増え、セミオープン延べ 227 回、助産師外来 113 回、計 340 回以上の妊婦検診を実施しています。初めは不慣れだった超音波を用いての検診でも、自然な会話をしながらコミュニケーションがとれるようになり、妊婦さんや家族の反応もよく、楽しみに来ていただいています。

当院で妊婦検診終了時のアンケート結果です。「佐沼病院での検診を何で知りましたか」については、通院先での情報が 37 名、71%と多く、分娩施設でのスタッフの方々の働きかけに助けられています。

こちらが広報用のポスターです。検診を受けるきっかけについては、「近いから」が最も多く、遠くへの通院が負担になっていると考えます。「検診を受けてみていかがですか」については、98%「よかった」と答えていただいています。聞きたいことが聞けた、ゆったりした検診時間、待ち時間が少ない、あたたかい雰囲気と、好意的な意見でした。そのほか、近くなのでサッと来てサッと終了して帰ることができる、エコーの時間もたくさんあり検診が楽しかった、最後まで検診が受けられたらいい、分娩もここでできたらいい、機会があったらまたお世話になりたいという意見もありました。2%の方は思ったよりよかったと答えていただきました。助産師がおもしろい、親切、丁寧、などのコメントをいただきました。

妊婦検診以外の活動については、乳房マッサージも常勤医のいない中、院長や以下の方々





#### 産婦人科外来のお知らせ

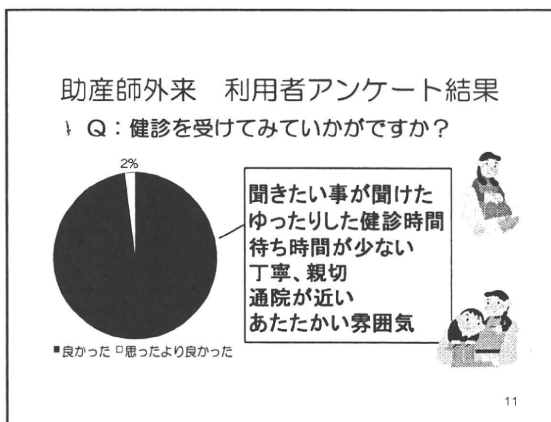
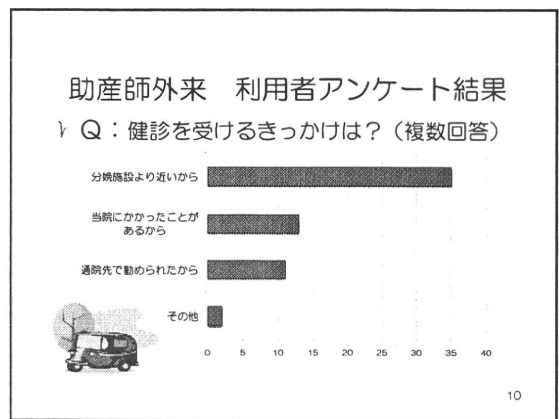
産婦人科外来のご案内

日	月	年	時	分	秒
1	2	3	4	5	6

#### セミナーオープンシステム

産婦人科外来のご案内

## 広報用ポスター



### 妊婦健診以外の助産師活動

- 乳房マッサージ
- 母乳・育児相談
- マザークラス・ペアクラス

の協力を得て平日できるようになり、予約制にて行っています。婦人科の分野でも2年ぶりに市の子宮がん検診が再開できたり、子宮頸がんワクチンの接種も可能になったりと、少しずつできることが増えています。

ここには挙げていませんが、ボランティア活動として市の母親サークルに参加し、ベビーマッサージ、育児相談、ヨガ、ピクスを行っています。このサークルは佐沼病院で分娩ができなくなるころにつくられたものですが、今は登米市のさまざまな企画の紹介を行ったり、救急対処法の講習会、芋煮会など仲間づくりにも力を入れ、登米市にはなくてはならないサークルの一つとなっています。

今後の課題として、広報活動の評価のため、今年8月から9月までの当院小児科を受診した母親、20代から30代を対象とした70名のアンケート調査を行いました。セミオープンシステム、助産師外来を知っている方83%、知らない方17%。セミオープンシステム、助産師外来を利用したい方59%。その理由として、近いから、待ち時間が少ない、上の子と一緒にいけるから、などの意見が多くありました。システムを利用しない方41%。その理由として、妊娠を考えていない、システムがよくわからない、分娩まで同じスタッフがよい、入院・分娩ができないから、との意見が多くありました。また、システムを利用したいが連携病院が限られている、検診料もほぼかからなくなり手当も高くなったが、産む場所が近くにない、産むこと自体を考えてしまう、ぜひ佐沼病院で再開してほしい、などの意見をいただきました。

要望をすべてかなえることはできませんが、妊婦検診にとどまらず助産師外来を利用しただくために、学級の開催、産後の乳房ケア、育児相談、婦人科の分野でも思春期、更年期、老年期とかかわっていくことで助産師を知ってもらい、地域に根ざした活動を続けていきたいと思っています。

集約化になり3年が経過し、改めて私たちがこうして仕事ができるのも、助産師外来継続にご協力いただいている皆様のおかげと感謝しています。大崎市民病院からは病棟カンファレンスに参加させていただいたり、タイムリーに新しい情報を教えていただき、さまざまなアドバイスもあり、登米市のことを考えてもらっています。

子育てをするには決してよい環境とは言えませんが、妊婦さんにも不平・不満だけではなく、自分から積極的に質問をしたり情報を集めたり、母親としての自分自身の力を存分に発揮できるように助産師としてかかわっていききたいと思っています。


最後に助産師外来の様子をスライドショーにしてみましたので、5分前後おつきあいいただきたいと思います。

(スライドショー)

**内藤** ご清聴、ありがとうございました。

今後の課題

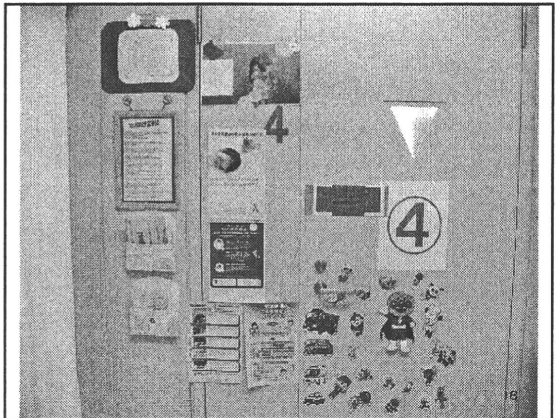
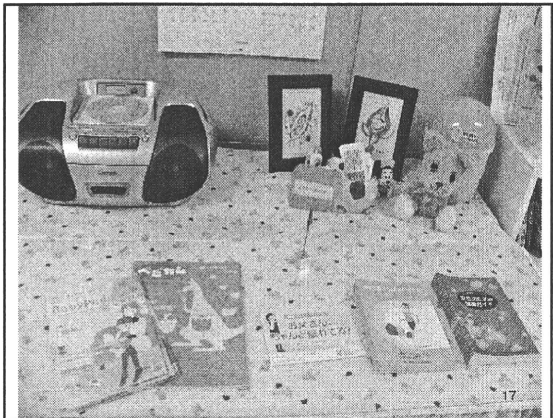
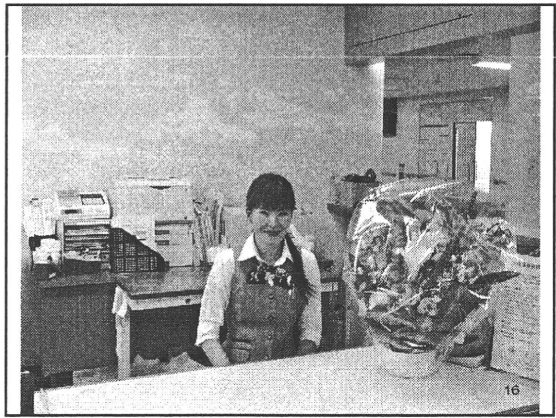
- ↳ 広報活動
- ↳ 定期的学級の開催
- ↳ 女性のライフサイクルにかかわる看護の充実

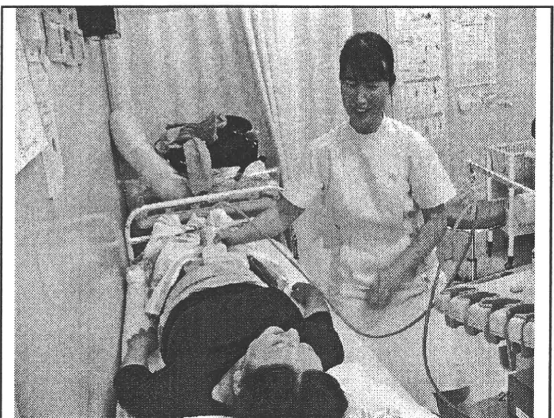
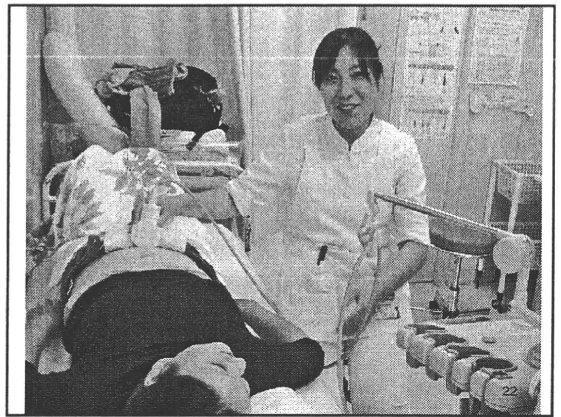
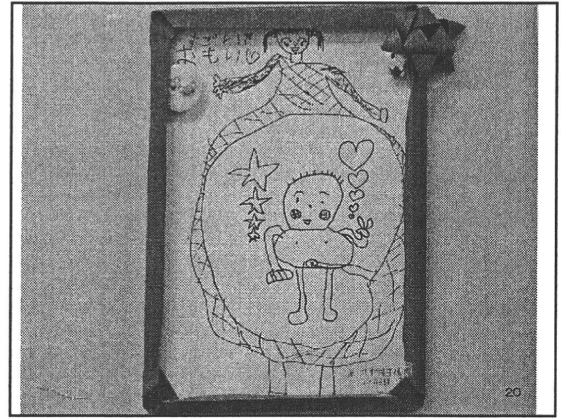
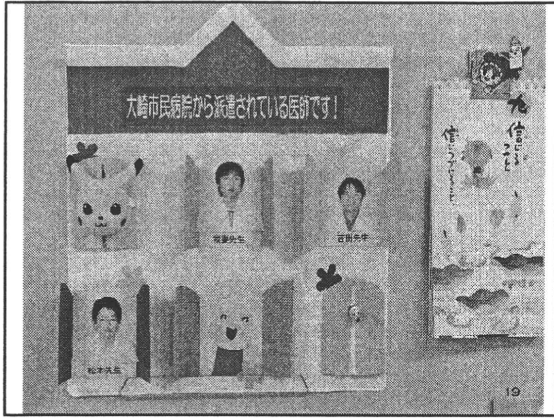


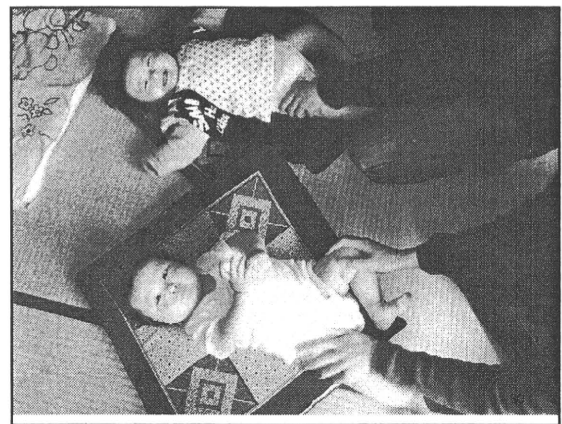
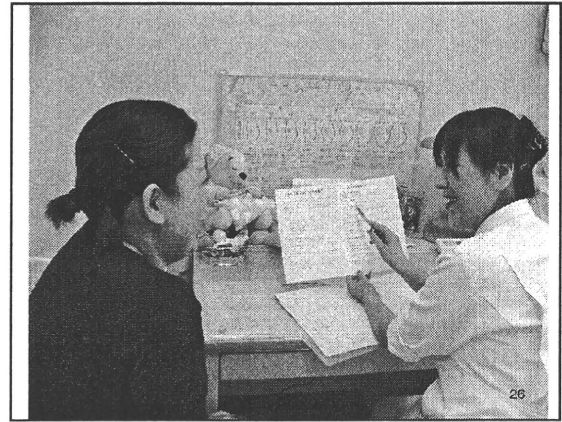
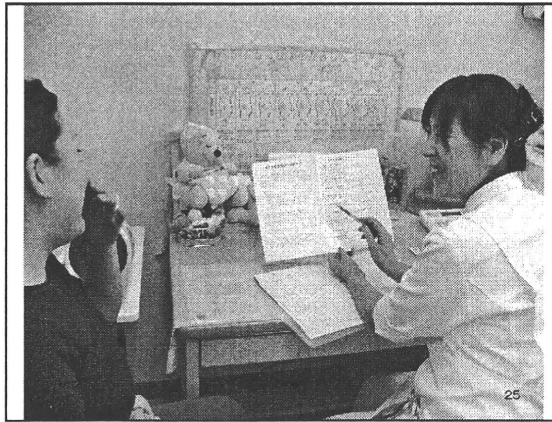
13

## 助産師外来のようす

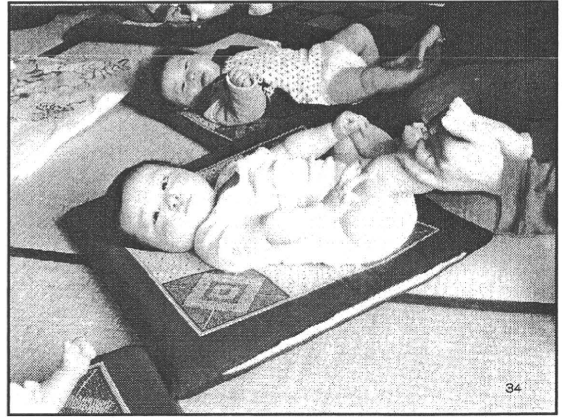
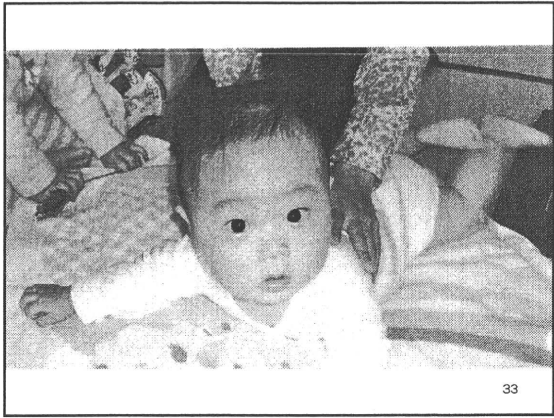
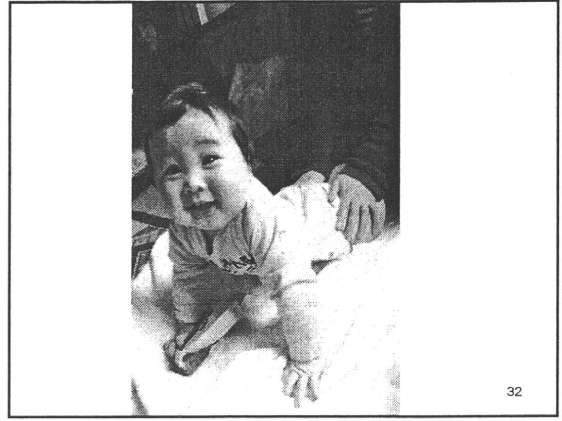
14

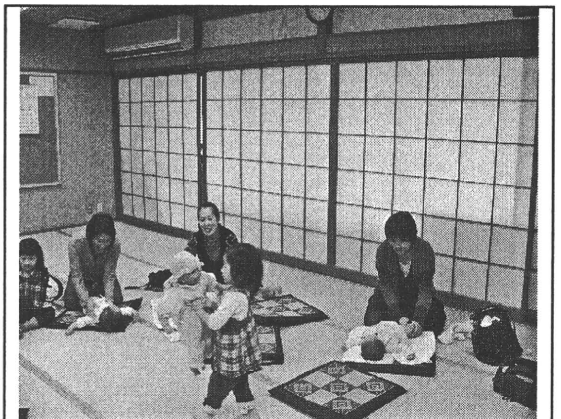
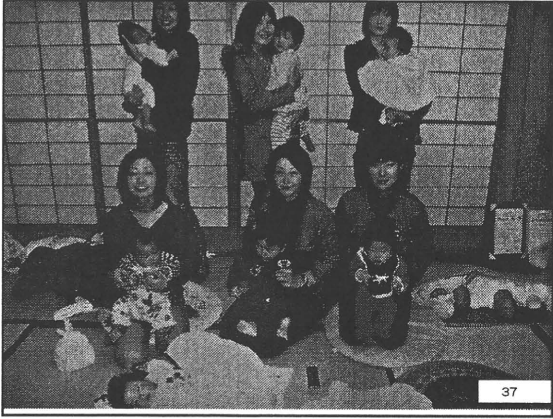


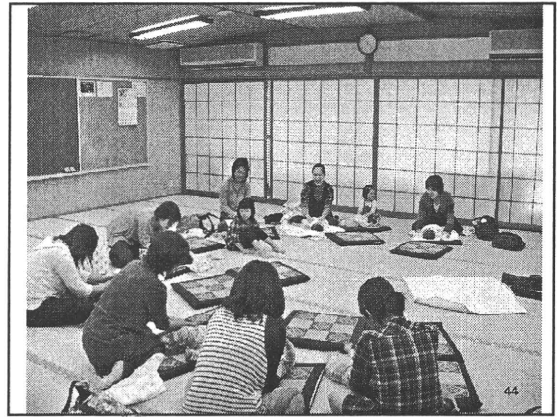




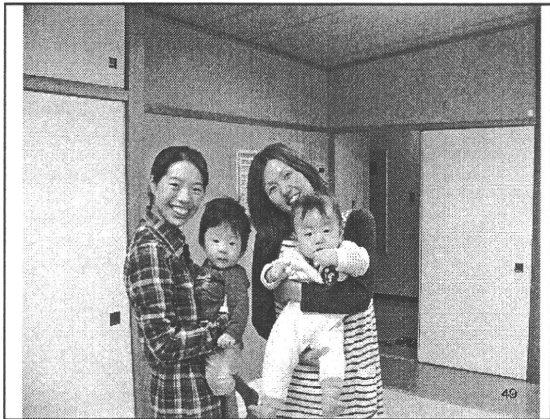












できないこともいっぱいあります。  
できることもいっぱいあります。  
できないことをなげくより、  
一人でも多くの人とつながっていたい。

50



どうぞ私たちをご利用下さい。

51

佐藤 内藤先生、ありがとうございました。700件の分娩が一気にどこに行ったのでしょうかというような、本当に切実な現実を突きつけられたと思っています。ありがとうございました。

次は「妊婦見守りシステムー地域助産師保健師連携ー」と題しまして、岩手県立大船渡病院の主任助産師である大和田先生をお願いいたします。

大和田先生をご紹介させていただきます。平成2年、山形県立高等保健看護学院の助産師学部をご卒業になられております。その後、平成2年、医療法人社団スズキ病院に就職されまして、その後、岩手県立江刺病院、大船渡病院、自治医科大学付属病院でお仕事をされまして、平成13年から岩手県立大船渡病院で勤務され、現在主任看護師兼主任助産師をなさっております。

それでは大和田先生、お願いいたします。

大和田 (スライド1) 皆さん、こんにちは。岩手県立大船渡病院の大和田です。今日はこのような盛大なフォーラムにお招きいただきまして大変ありがとうございます。現在私は産婦人科外来に勤務していて、3年目になります。(スライド2) 本日はお話する内容です。

(スライド3) 岩手県沿岸南部の産科医療の実情からお話いたします。(スライド4) 先ほど小笠原先生もお話しされましたけれども、岩手県では盛岡市に唯一岩手医科大学に総合周産期母子医療センターがあります。そして、当院は地域周産期母子医療センターとして位置づけられ、岩手県沿岸南部の約8万人の周産期医療を担っています。しかし、出産できる施設は当院と連携病院の釜石病院の2施設のみです。

(スライド5) 大船渡病院のスタッフ数です。産婦人科医師は5名、病棟助産師12名、外来助産師3名です。分娩件数は昨年656件でした。

(スライド6) これは、産婦人科医師不足による産婦人科休診の様子ですが、岩手県もまた産婦人科医師不足により、産婦人科休診の病院が相次いでいます。×印のところが休診で、平成14年から9つの病院が休診となりました。(スライド7) また、岩手県は面積が広大であり、厳しい地形・北国特有の気候条件が重なり、交通アクセスが非常に悪く、その影響で妊婦さん方ははるか遠い出産施設まで1時間から2時間の通院を余儀なくされている現状です。

(スライド8) 次に岩手県周産期医療情報ネットワークシステム、『イーはと一ぶ』の紹介です。(スライド9) 『イーはと一ぶ』とは、妊婦健診情報・分娩情報・新生児情報などをインターネットで結び、市町村や医療機関が情報を共有することで、地域住民に安心・安全な妊娠、出産、育児を支援する見守りシステムのことです。(スライド10) 実際の画面です。通常のインターネットのブラウザで表示できます。(スライド11) これは妊婦さんの基礎情報の登録画面です。入力しやすいようにプルダウンメニューや正常値入力ボタンなど工夫されています。(スライド12) こちらが検査入力画面になっております。妊婦健診時の情報や検査結果を入力します。

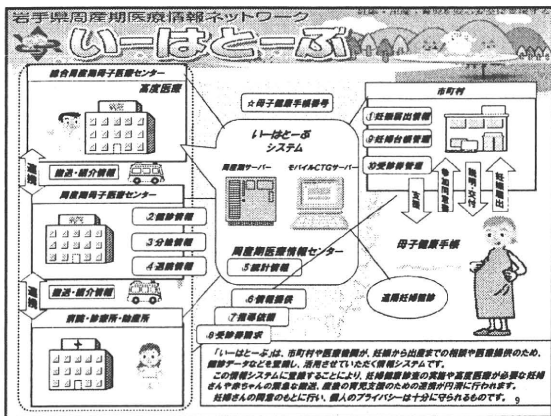


## ※岩手県

- 1) 距離の壁  
(面積が広大)
- 2) 地形の壁  
(山岳地形)
- 3) 気候の壁  
(北国気候)



- 岩手県南沿岸の産科医療の実情
- 岩手型周産期医療情報ネットワーク  
“いーはとーぶ” の紹介
- 病院一市町村連携での助産師・保健師の役割
- 病院一病院連携での助産師の役割
- 病院一助産院連携での助産師の役割
- 今後の地域助産師・保健師連携のあり方



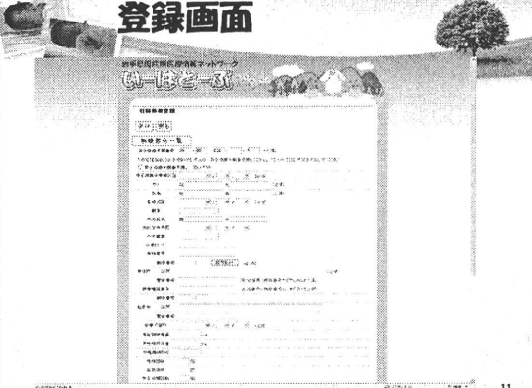
### コンテンツ

● 岩手県南沿岸産科医療圏ネットワーク「いーはとーぶ」の紹介  
● 岩手県南沿岸産科医療圏ネットワーク「いーはとーぶ」の紹介  
● 岩手県南沿岸産科医療圏ネットワーク「いーはとーぶ」の紹介

### お申し込みのフロー

参加標準者：妊婦健康診査受診者（産科医療圏）  
【2ヶ月間システム利用申込書】  
\* 岩手県南沿岸産科医療圏ネットワーク事務局にて受付

## 登録画面



## 検査入力画面



10月21日現在、大船渡病院で入力されているいーはとーぶ登録数は640名でした。すべての妊婦さんに登録して頂いています。(スライド13)次に病院・市町村連携での助産師・保健師の役割です。(スライド14)岩手県沿岸南部地域は、遠野市を含めると東京都より広い面積ですが、平成21年4月より、『いーはとーぶ』を活用しての市町村の保健師さんを含めた、地域助産師・保健師の連携を図っております。(スライド15)(スライド16)3市町村の保健師さん方と病院側は、医師・助産師・医療クラーク・病院医事課も参加して頂き円滑ないーはとーぶ連携ができるように会議を行っています。

(スライド17)実際の連携方法は、いーはとーぶの連携情報のページを使用し行っています。はじめに、病院から入力画面に依頼内容を入力し確定を押します。同じように市町村は保健指導内容を入力画面に入力し、確定を押すと、(スライド18)こうようにメールが送信されます。メール機能により、リアルタイムに連携ができます。(スライド19)病院はピンク、市町村はブルーの背景で、掲示板形式に表示され、どのようにかかわったか連続表示され、妊婦さんへの最初からの関わりがどのスタッフでも確認することができ、看護ケアには有効なシステムと言えます。

(スライド20)次に病院間の連携での助産師の役割についてです。(スライド21)私たちの地域では、地域周産期母子医療センターの大船渡病院は、主にハイリスク妊娠分娩を、地域総合病院の釜石病院は、院内助産システムでローリスク妊娠・分娩を担当する機能分担をしています。その中でITでの情報共有を図ったり、救急搬送システムでの搬送、大船渡病院からの医師の応援、マンパワーの提供をし、連携を強化しています。

(スライド22)通常、1つの病院で行っている妊産褥婦さんの関わりを私たちの地域は機能分担し、2つの病院で行っています。実は、距離の離れた2つの病院で機能分担・連携することはとても難しく、そのため、助産師連携が重要となっています。

(スライド23)実際のITによる情報共有の内容です。現在は県立病院の専用線を利用して、大船渡病院・釜石病院の入院患者情報を共有しています。ですから、大船渡病院にいながら釜石病院の妊婦さんの状態を、釜石病院にいる医師・助産師も大船渡病院の妊婦情報をリアルタイムに知ることができます。(スライド24)平成19年9月から、大船渡病院・釜石病院連携会議を年2回行い、今まで計7回の会議の場を設けております。会議は助産師が中心になって進めており、会議には産婦人科医師、小児科医師、助産師、看護師長、事務職員が参加し、連携を強化しています。(スライド25)そのうち2回はテレビ会議システムを利用して連携会議を行っています。

(スライド26)次に、病院・助産院連携での助産師の役割についてです。(スライド27)遠野助産院の健診は、大船渡病院・釜石病院のローリスクの妊婦さんが対象です。(スライド28)妊婦健診情報は遠野助産院の助産師がいーはとーぶに入力し、情報交換されています。離れていても妊婦健診情報がすぐにパソコンに送られてきます。(スライド29)現在、超音波画像動画伝送システムの実証実験も行っており、さらに高度な胎児診断ができるよう目指しています。また、センター病院と連携して、助産師の超音波検査を支援すること

- 岩手県南沿岸の産科医療の実情
- 岩手型周産期医療情報ネットワーク  
“いーはとーぶ”の紹介
- 病院—市町村連携での助産師・保健師の役割
- 病院—病院連携での助産師の役割
- 病院—助産院連携での助産師の役割
- 今後の地域助産師・保健師連携のあり方

13

### 地域助産師連携

岩手県南沿岸の産科医療の実情  
岩手型周産期医療情報ネットワーク  
“いーはとーぶ”の紹介

東京都より広い面積

14



### 岩手県周産期医療情報ネットワーク いーはとーぶ

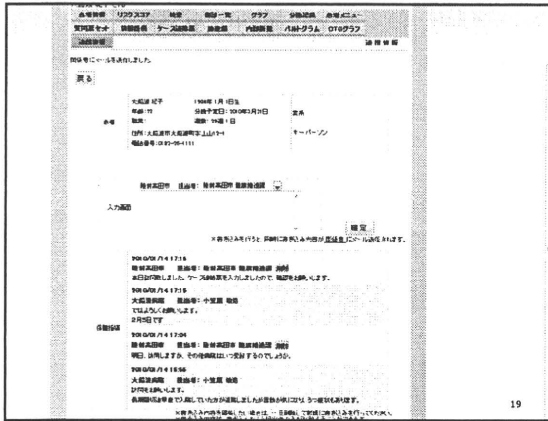
大船渡 紀子さん

〒992-0201 岩手県大船渡市大船渡 1-1-1  
TEL: 0192-36-1111

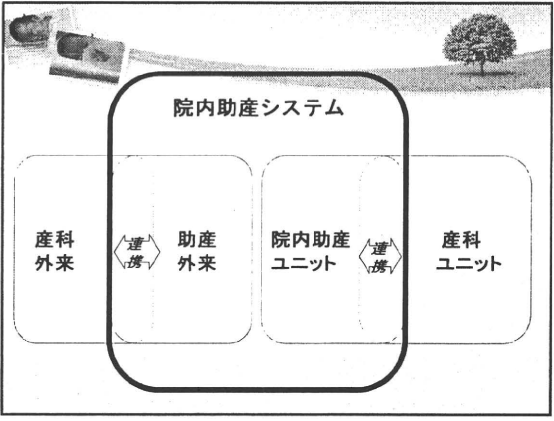
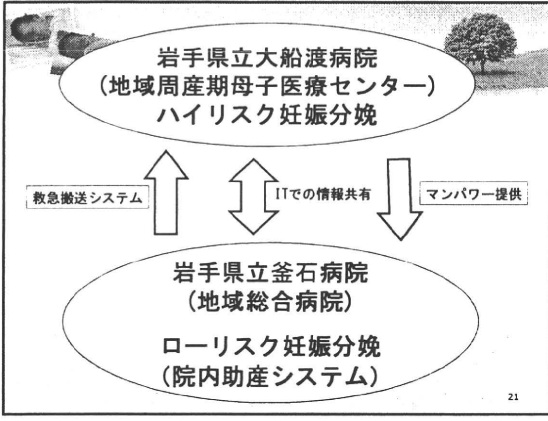
17

18





- 岩手県南沿岸の産科医療の実情
- 岩手型周産期医療情報ネットワーク  
“いーはとーぶ”の紹介
- 病院—市町村連携での助産師・保健師の役割
- 病院—病院連携での助産師の役割
- 病院—助産院連携での助産師の役割
- 今後の地域助産師・保健師連携のあり方



専用ネットワークによる  
リアルタイム情報共有

岩手県立大船渡病院  
岩手県立釜石病院  
岩手県立大船渡病院  
岩手県立釜石病院  
岩手県立大船渡病院  
岩手県立釜石病院





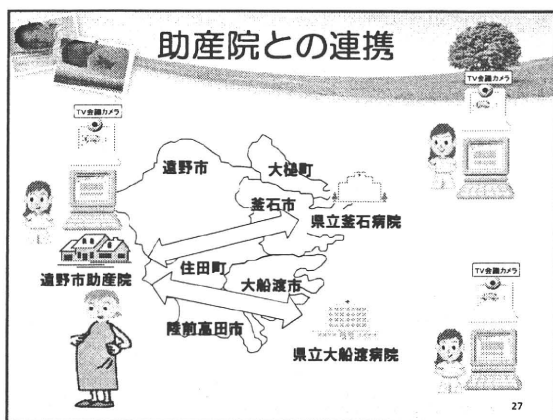
テレビ会議の様子

### 岩手県南沿岸の産科医療の実情

### 岩手型周産期医療情報ネットワーク

### “いーはとーぶ”の紹介

- 病院—市町村連携での助産師・保健師の役割
- 病院—病院連携での助産師の役割
- 病院—助産院連携での助産師の役割
- 今後の地域助産師・保健師連携のあり方



### 遠隔妊婦健診での情報共有

遠野助産院の助産師が健診情報を入力  
リアルタイムで病院の医師が確認



### 遠隔妊婦健診ガイド

遠隔妊婦健診ガイド  
身近な地域で安全な妊娠経過を握るために